



# 雪女



川崎ゆきお

「雪女って色々と意味があったのですねえ」

妖怪博士付きの編集者がいつものように来て、喋っている。聞いているのは当然妖怪博士で、縁側のある奥の六畳だ。雨が降っており、少し肌寒い。

編集者は雪女について調べたらしい。それを妖怪博士に話し、何か意見をもらいたいようだ。

「雨が降っておるのう」

「ここの前の路地、ぬかるんでるので下駄が必要ですよ」

「最近見んのう、下駄履きの人は」

「板さんなんか履いているんじゃないですか」

「ああ、板前さんか」

「その板さん、偶然店の前で見かけのですが、背が低い。高い下駄を履いていたんでしょうねえ。その日は普通の靴でした」

「まあ、成績の悪い生徒に下駄を履かすとも言うのう」

「そういう話じゃなく、雪女は、どうですか」

「まだ、雪の季節じゃない。雨が降っておろう」

「いえ、雑誌の仕事は早い目に作り込むのです」

「そうか、もう冬は近いのう」

「雪女は出稼ぎで来た人相手の売春婦だと言いますねえ」

「出稼ぎかい。何処に」

「造り酒屋なんかです」

「ああ、杜氏さんか。その時期だけ酒を作り込みに来るのだろうねえ」

「その人たち相手に雪女が出るとか。その正体は近くの農家の婦人だと言います」

「本物の雪女がいたんだろうねえ。これはまあ、精霊のようなものかもしれん。雪国なので、寒いので、魔女系かもしれんのう」

「魔女は寒い地方のものですか」

「そういう印象がある。魔女を発明したのは北国の人たちだろう」

「魔女は洋物ですね。雪女は白い着物で、目は細いが鋭い。年は取らないようです」

「じゃ、妖怪に近いのう」

「だから、その雪女に化けて、つまり人ではない状態で売春していたのですね」

「まあ、雪女なら、いいんだろうねえ」

「雪女なら仕方がないと」

「そうじゃ、雪女に惑わされた……とかな。これは狐につままれたのと同等だ」

「つまられるのですか」

「だまされるという意味じゃ」

「はい」

「実際には寒さと関係するのじゃろう。山で遭難し、寒さで意識が危うくなるとき、現れる。人為ではなく、自然現象に近い。だから、精霊系かもしれん。私は雪だるまが好きだのう」

「雪だるまの妖怪ですか」

「作った覚えのない雪だるまが立っておるんじゃ」

雨が降っている。やみそうにない。

「雪女ではなく雨女だと、かなり違うのう」

「ああ、あの人が加わると雨になるってやつですね」

「それに、雨女は自分で言い出す。私は雨女だと」

「雨男もいますねえ」

「同じ意味じゃな。行楽には参加させたくない」

「はい。しかし運動会なんか、雨男や雨女のせいじゃないですよね」

「もう少し規模の小さな集まりだな」

「そうですねえ。でも因果関係はないでしょ」

「あろうはずはないが、あの人が加わると雨になるというのは、たまにあるのう」

「あります。あります」

「雪女と雪男では全く違ってしまう」

「雪男は怪物でしょ、昔の言い方だとヒマラヤの雪男は有名です。モンスターですよ。男女の違いで、ジャンルが違ってしまいますねえ」

「だが、雨女雨男は同じじゃ。非常に浅い話で、根がない。原型に根深いものがいためかもしれんのう」

「そうですねえ。お天気だけに特化してますね。雨か晴れかの」

「曇男も、曇女もいない。あの人が参加すると曇り空になるというのは、中途半端じゃ。曇りでは中止にならんだろう。まあ、あの人が来ると場の雰囲気が曇るという是有るがな。これは天気とは関係ない」

「そうですねえ」

「しかし、この雨なかなかやまんのう」

「強くないからいいですよ」

「しとしと降っておる。こういう日は妖怪が出そうじゃぞ」

「雨に関係する妖怪を調べてみます」

「そうしなさい。私に聞かなくとも、色々出ておるじゃろ」

「そうなんですが、妖怪博士の発明した妖怪を聞きたいのです」

「駄目じゃないか、勝手に作っては」

「あ、はい」

「急に言われても出て来ん」

「はい」

「ビニール傘の妖怪は既にやったしのう」

「出ませんか」

「こういうものは、頭で考えるのではなく、実際に雨の中で思いつくものじゃ」

妖怪博士は何か言い出そうとしたが、すぐにやめた。

「ありましたか」

「いや、いい。つまらん話じや、これはやめる」

「聞かせてください」

「妖怪飴ちゃんと言つて、粘い水飴を垂らす妖怪でな、雨の日に……」

「じゃ、このへんで失礼します」

「そうか」

了